

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

令和 5 年 5 月 23 日現在

機関番号：34303

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2017～2022

課題番号：17K18036

研究課題名(和文) 学生アスリートのキャリア形成が埋め込まれた社会的文脈に関する国際比較研究

研究課題名(英文) The international comparison regarding social context embeded student-athlete's career development

研究代表者

東原 文郎 (Tsukahara, Fumio)

京都先端科学大学・健康医療学部・准教授

研究者番号：50453246

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,200,000円

研究成果の概要(和文)：「体育会系学生は他に比して良い就職を得る」という体育会系神話の起源と変容について、それが埋め込まれた(embedded)社会的文脈をたどり、直近の趨勢について統計的に記述した上で、体育会系神話のゆくえについて展望した。アメリカ、デンマーク、イギリス、フランスといった欧米諸国へのフィールド調査を通じ、学生アスリートのキャリア形成は、それが埋め込まれた社会文脈によって様態が異なること、また日本では日本特殊な雇用慣行(企業メンバーシップ型雇用、新卒一括採用、学校歴主義、大企業志向、など)に強く依存する現象であることを、社会学的なデータと議論によって明らかにした。

研究成果の学術的意義や社会的意義

学生アスリートのキャリア形成は、従来心理学の枠組みからアスリートの引退、セカンドキャリアへの移行に伴う困難を軽減しようという目的で、コンピテンシーを身につけることやデュアルキャリアの推進、学業との両立などが推奨されてきた。本研究はそうしたアスリートのキャリア形成やその支援策が、社会の文脈によって多様であること、またそれが当該社会のスタンダードとされる雇用慣行に強く依存する現象であることを確認した点で、学術的なオリジナリティが認められる。この文脈依存性を前提にして初めて、各社会において既に多様なアスリートキャリア形成に対し、有効な支援策を提案できることになる点で社会的な意義がある。

研究成果の概要(英文)：The origins and transformation of the Student-athlete myth that "college athletes get better jobs than others" are examined by tracing the social context in which the myth was embedded, describing the most recent trends statistically, and discussing the future of the myth. Through field research in Western countries such as the U.S., Denmark, the U.K., and France, we found that the career development of student athletes differs depending on the social context in which they are embedded. And also, in Japan, sociological data and discussions revealed that this phenomenon is strongly dependent on Japan-specific employment practices (corporate membership employment, lump-sum hiring of new graduates, school history, preference for large companies, etc.).

研究分野：スポーツを対象とした人文社会科学

キーワード：学生アスリート 就職 雇用慣行 国際比較 ジョブ型雇用 メンバーシップ型雇用

## 1. 研究開始当初の背景

少子化、大学設置規制緩和(1991)といったわが国の大学を取り巻く社会環境の変化が、多くの私立大学の学生確保戦略の中にスポーツを位置づけさせた。2010年代半ばの時点で体育会活動への参加学生は30%に達したとも言われ、運営、教育、キャリア形成といった支援制度の整備が期待されていた(日本私立大学連合、2015)。スポーツ庁は2016年4月、「大学スポーツの振興に関する検討会議」を発足させ「大学スポーツの産業化」を目指すと共に、「大学は学生が学業を修めスポーツでも活躍するための修学上の配慮をすると同時に、将来に向けたキャリア形成支援を行って社会に送り出す」ことを重点方策の一翼に位置づけた(スポーツ庁、2016)。大学スポーツの産業化を梃子に<体育会系>のキャリア形成支援体制も拡充する狙いがあったと考えられたが、そうした試みの成功を保障するような学術的見解はなく、メカニズムは不明なままであった。

わが国の<体育会系>就職に関する実証研究は、「学校から労働への移行(transition)」に関する教育社会学的研究の成果を引き継ぎながら、2000年代以降少しずつ行われてきていた。ここでは例えば、文化系よりスポーツ系クラブ所属者が望ましい就職を達成しがちであること(梅崎、2004;平沢、2010)や、クラブ活動への参加が正規就労や賃金を上昇させること(原ら、2004)、体育会所属新規大卒者の特性と企業が求めている人材とは一致する要素があること(葛西、2012)などが明らかにされていた。他方、経済社会学では「個人的な関係が経済的交換の文脈となること」が「構造的埋め込み(embeddedness)」と定義され(Granovetter、1985)、学卒者のキャリア形成のメカニズムを追求する際の実効的な枠組として彫琢されていた(Rosenbaum & Kariya、1989; Kariya & Rosenbaum、1995)。わが国の教育社会学はこの枠組を最大限利用し、大卒者一般の初期キャリア形成が、企業大学間の就職協定に基づく新卒一括採用の慣行や実績関係、指定校推薦を巡る学内選抜およびOB・OGリクルーターの活躍といった社会的文脈に強く規定される事実を明らかにしていた(苅谷ら、1992; 1995; 2007; 苅谷編、2010)。すなわち、上掲の先行研究はまさに、そうした学生アスリートのキャリア形成が埋め込まれた社会的制約への洞察が欠落していたのである。

## 2. 研究の目的

そこで本研究は、学生アスリートのキャリア形成に関する社会横断的なメカニズムの解明を志向し、大学スポーツがマスのレベルに達し、スポーツ政策の争点となりうる諸地域における学生アスリートのキャリア形成が埋め込まれた制度とその上で繰り広げられる諸アクターの相互行為(学生の就職/企業の採用活動、大学/スポーツ指導者のキャリア形成支援活動、等)の比較を通じて、わが国の<体育会系>就職が成立・維持されるための社会・文化・制度的条件を明らかにすることを企図した。

## 3. 研究の方法

経済社会学の蓄積は、企業と学生の相互行為[採用/就職活動]は特定の社会的文脈におかれており、相互行為の様態や戦術の適切性などは、文脈の違いに依存して異なる可能性があるため(福井、2016)。それが埋め込まれた制約を合わせて理解すべきであること(Bills、2003)を教えている。したがって、本課題が<体育会系>就職が維持されるメカニズムの解明を企図する、複数の国や地域にある学生アスリートのキャリア形成について当該地域の制度的文脈ごと記述して比較することを試みた。

## 4. 研究成果

欧州3カ国(デンマーク、イギリス、フランス)におけるエリート競技者育成事業における中央競技団体と自治体、および教育機関の連携等について、アスリートのキャリア支援政策担当者や各機関で実際に勤務するアスリート・ライフ・アドバイザーにインタビュー調査を実施した。また、アメリカについては学生アスリート支援者の同業者組合であるN4A(The National Association of Academic and Student-Athlete Development Professionals)のカンファレンスに参加してNCAAレベルでの考え方を把握した上で、メリーランド大、カリフォルニア大パークレー校、フロリダ大等でキャリアを含む学生アスリートのサポートを担当する職員にヒアリングを行った。

調査の結果は早稲田大学スポーツ科学研究科に博士学位申請論文として提出した「日本の大学新卒就職における「体育会系神話」の成立と変容」をはじめ、書籍『就職と体育会系神話

大学・スポーツ・企業の社会学』(青弓社、単著)や論文「デンマークのエリートスポーツ政策の特性」(日比野幹生との共著、オリンピックスポーツ文化研究5(5)131-148)にまとめた。学会発表も行った(「学生アスリート支援のための大学間連携ネットワークの構築に向けて米国における学生アスリート支援担当者会議N4Aの事例研究」長倉富貴、石川勝彦、幸野邦男との共同発表、日本大学教育学会第41回大会@玉川大学)。

デンマークでは学生アスリートと認定されることで、高校では3年の代わりに4年まで、大学

では4年の代わりに6年まで、修業年限を延ばすことを学生アスリート本人の主体性において選べるようにする。その「学生アスリート」として認定を受けるのも、本人による中央スポーツ統括機関や地方自治体の教育委員会への申請がベースになる。本人の申請に基づき、学生アスリートとしての認定を受け、その認定に基づいて、教育現場では一般の生徒・学生と同様の教育内容を楽しむよう融通する。それが中央スポーツ統括機関と地方自治体と学校が連携して、学生アスリートに対して行う「配慮」であった。

一方アメリカでは、学生アスリートの教育は大学に一義的な責任がある、との認識に立ち、大学に学生アスリート支援システムを構築させる。ただし、NCAAが巨額の利益の中から費用を一部助成する形を取る。学生スポーツ産業のスケールメリットを存分に生かして大学責任の支援システム構築・発展を促し、もって学生スポーツ産業の維持・発展への基礎とする。

大学やNCAAによるアスリート労働力の搾取との批判もあるが、アメリカでは大学の学位は労働市場で大きな意味を持つため、主たる活動がスポーツであっても大学教育を受けることは実質的な社会的上昇の手段となる。授業料の高騰も日本の比ではなく、特に貧困層出身者にとって奨学金の魅力は十分に大きい。したがって、学生アスリートはプロに上がらない場合でも、大学教育を受ける権利を獲得するために、競技を続けるインセンティブがある。

米国では、スポーツ能力を学業能力に読み替えるというレトリックを用いて大学までの進学や奨学金受給のシステムを整えているのに対し、欧州では、アスリートの全人的な理解の下、スポーツ能力と学業能力を完全に分けて考え、一人の個人としてパラレルに追求できるようサポート体制を整えていた。

「制度化された自由労働市場（ジョブ型）」の雇用慣行があり、かつ、学生スポーツが既に事実上の巨大ビジネスとして成立してしまっているアメリカと、雇用慣行としては「職種メンバーシップ（ジョブ型）」であり、学校教育に職業トレーニング期間としての社会保障的な意味合いを持たせる欧州とは、大学在学中にインテンシブな競技生活を送ることの意味が全く異なった。また日本では学生アスリートのキャリア形成は日本特殊的な雇用慣行（企業メンバーシップ型雇用、新卒一括採用、学校歴主義、大企業志向、など）を基底に、極東アジアの元日帝勢力圏に独特の企業スポーツ文化の成立に強く依存する現象であることなどを検討した。

以上の通り、雇用環境を中心とする社会文脈が異なるため、学生アスリートのキャリア形成についての考え方とサポートシステムには多様性があり、当該社会文脈に応じた合理性が社会ごとに追求されていることを確認できた。しかしその異同を生み出すメカニズムの詳細を描き出すまでには至らなかった。今後の課題とする。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計11件（うち査読付論文 5件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 6件）

1. 著者名 石川勝彦, 東原文郎, 舟橋弘晃, 横田匡俊, 澤井和彦, 長倉富貴, 中村祐介, 岡本円香	4. 巻 32(2)
2. 論文標題 体育会学生の人気企業への内定に学業および競技のパフォーマンスが与える影響	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 スポーツ産業学研究	6. 最初と最後の頁 207-215
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -
1. 著者名 日比野幹生・東原文郎	4. 巻 5
2. 論文標題 デンマークのエリートスポーツ政策の特性	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 オリンピックスポーツ文化研究	6. 最初と最後の頁 131 - 148
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 東原文郎	4. 巻 71(2)
2. 論文標題 “スポーツ推薦体育会系”の実像 “一般受験体育会系”との比較から	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 体育の科学	6. 最初と最後の頁 93-102
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 東原文郎, 横田 匡俊, 舟橋 弘晃, 澤井 和彦, 長倉 富貴, 石川 勝彦, 中村 祐介, 村島 夏美	4. 巻 29(4)
2. 論文標題 学生アスリートにおける学業と競技の両立意識の実態とその背景	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 スポーツ産業学研究	6. 最初と最後の頁 281-291
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 束原文郎	4. 巻 2019年度
2. 論文標題 日本の大学新卒就職における「体育会系神話」の成立と変容	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 早稲田大学スポーツ科学研究科博士論文	6. 最初と最後の頁 1-167
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 束原文郎	4. 巻 28 (4)
2. 論文標題 書評：一般社団法人アリーナススポーツ協議会[監修]，大学スポーツコンソーシアムKANSAI[編]『大学スポーツの新展開 日本版NCAA 創設と関西からの挑戦』	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 スポーツ産業学研究	6. 最初と最後の頁 pp.365-369
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 束原文郎	4. 巻 28 (4)
2. 論文標題 書評：宮田由紀夫 著 『暴走するアメリカ大学スポーツの経済学』	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 スポーツ産業学研究	6. 最初と最後の頁 pp.371-375
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 束原文郎，川井圭司，西村大介，松橋崇史	4. 巻 10
2. 論文標題 大学スポーツのオルタナティブを考える	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 Sports Business & Management Review	6. 最初と最後の頁 pp.2-7
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 束原 文郎	4. 巻 10月号
2. 論文標題 体育会系の研究：エリート神話の成立と崩壊	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 中央公論	6. 最初と最後の頁 pp130-137
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 束原 文郎	4. 巻 742
2. 論文標題 体育会系神話の歴史と現在 コロナ禍にみる変化の兆し	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 日本労働研究雑誌	6. 最初と最後の頁 48-63
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計13件（うち招待講演 2件 / うち国際学会 2件）

1. 発表者名 束原 文郎
2. 発表標題 <体育会系>就職最盛期に関する仮説生成的研究
3. 学会等名 日本体育・スポーツ・健康学会 第71回大会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 長倉富貴，石川勝彦，幸野邦男，束原文郎
2. 発表標題 学生アスリート支援のための大学間連携ネットワークの構築に向けて 米国における学生アスリート支援担当者会議N4Aの事例研究
3. 学会等名 日本大学教育学会 第41回大会@玉川大学
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 束原文郎, 石川勝彦, 舟橋弘晃, 横田匡俊, 澤井和彦, 長倉富貴, 中村祐介, 岡本円香, 小沼里奈
2. 発表標題 学生アスリートの就活満足度に影響を与える要因の検討 ~学生アスリート・プレミアムに着目して
3. 学会等名 日本スポーツ産業学会 第28回大会@日本体育大学
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 石川勝彦, 束原文郎, 舟橋弘晃, 横田匡俊, 澤井和彦, 長倉富貴, 中村祐介, 岡本円香, 小沼里奈
2. 発表標題 人気企業への学生アスリート就職を規定する要因 - 決定木分析を用いた探索的分析 -
3. 学会等名 日本スポーツ産業学会 第28回大会@日本体育大学
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 束原文郎, 澤井和彦, 舟橋弘晃, 横田匡俊, 中村祐介, 原田俊一郎, 村島夏美
2. 発表標題 学生アスリートプレミアムへの期待形成とその背景
3. 学会等名 日本スポーツ産業学会 第28回大会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 束原文郎, 澤井和彦, 横田匡俊, 舟橋弘晃, 長倉富貴
2. 発表標題 学生アスリートにおける学業と競技の両立意識の実態とその背景
3. 学会等名 日本体育学会 第69回大会 体育社会学専門領域
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 Fumio TSUKAHARA, Kazuhiko SAWAI, Hiroaki FUNAHASHI, Masatoshi YOKOTA, Yusuke NAKAMURA, Natsumi MURASHIMA
2. 発表標題 What Advantage Do Student-athletes Expect in Japanese New Graduates Job Market?
3. 学会等名 The 26th European Association for Sport Management (国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 束原文郎, 川井圭司, 西村大介, 松橋崇史
2. 発表標題 大学スポーツのオルタナティブを考える
3. 学会等名 日本スポーツ産業学会 第28回大会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 Fumio Tsukahara
2. 発表標題 A Study on the Relationship between College Sport Participation & 1st Job-search Success
3. 学会等名 World Congress of Sociology of Sport, Taoyuan, Taiwan at the National Taiwan Sport University. "Reimagining Democracies and Sport." May 30-June 2, 2017 (国際学会)
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 束原 文郎
2. 発表標題 <体育会系>就職のこれまでとこれから
3. 学会等名 第45回東伏見スポーツサイエンス研究会(招待講演)
4. 発表年 2017年



1. 発表者名 束原 文郎
2. 発表標題 図書解題: Aaron Miller 著, Buying in: Big-Time Women's College Basketball and the Future of College Sports
3. 学会等名 日本スポーツ社会学会 第32回大会、3/17、中京大学豊田キャンパス
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 束原 文郎
2. 発表標題 コロナ禍にみる「体育会系神話」の変化
3. 学会等名 日本スポーツ産業学会 第31回大会、7/9、帝京大学八王子キャンパス
4. 発表年 2022年

〔図書〕 計3件

1. 著者名 束原 文郎	4. 発行年 2021年
2. 出版社 青弓社	5. 総ページ数 282
3. 書名 就職と体育会系神話	

1. 著者名 高峰 修, 岡本純也, 千葉直樹, 束原文郎, 横田匡俊	4. 発行年 2022年
2. 出版社 杏林書院	5. 総ページ数 232
3. 書名 現代社会とスポーツの社会学	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

## 6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
連携研究者	石川 勝彦  (Ishikawa Katsuhiko)  (30714779)	鳴門教育大学・高度学校教育実践専攻(教職系)・講師    (16102)	
連携研究者	横田 匡俊  (Yokota Masatoshi)  (40386660)	日本体育大学・スポーツマネジメント学部・教授    (32672)	
連携研究者	幸野 邦男  (Kono Kunio)  (80792697)	山梨学院大学・カレッジスポーツセンター・准教授    (33402)	
連携研究者	舟橋 弘晃  (Funahashi Hiroaki)  (10758551)	中京大学・スポーツ科学部・准教授    (33908)	
連携研究者	澤井 和彦  (Sawai Kazuhiko)  (90302786)	明治大学・商学部・准教授    (32682)	

## 7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

## 8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関		
米国	University of California, Los Angeles		